

四二 如来滅後五百歲始觀心本尊抄

ほんちようしゃもん 日蓮撰

ぶんえい 文永十年 五二歳御作) 2388P

まかしかん 摩訶止觀第五に云く開合の異なり

そ 夫れ一心に十法界を具す一法界に又十法界を具すれば百法界な

り一界に三十種の世間を具すれば百法界に即三千種の世間を具す、

比の三千・一念の心に在り若し心無んば而已介爾も心有れば即ち

三千を具す乃至所以に称して不可思議と為す意此に在り」

問うて云く玄義に一念三千の名目を明かすや、答えて曰く妙樂

云く明かさず、問うて曰く文句に一念三千の名目を明かすや、答え

て曰く妙樂云く明かさず、問うて曰く其の妙樂の釈如何、答えて

曰く未だ一念三千と云わず等云云、問うて曰く止觀の二三四等に

一念三千の名目を明かすや、答えて曰く之れ無し、問うて曰く其の

証如何、答えて曰く妙楽云く「故に止觀に至つて正しく觀法を明か
 す並び三千を以て指南と為す」等云云、疑つて曰く玄義第二に云く
 「又一法界に九法界を具すれば百法界千如是」等云云、文句第一に
 云く「一人に十法界を具すれば一界又十界なり十界各十如是あれ
 ば即ち是れ一千」等云云、觀音玄に云く「十法界交互なれば即ち
 百法界有り千種の性相・冥伏して心に在り現前せずと雖も宛然と
 して具足す」等云云、問うて曰く止觀の前の四に一念三千の名目を
 明かすや、答えて曰く妙楽云く明さず、問うて曰く其の釈如何、答
 う弘決第五に云く「若し正觀に望めば全く未だ行を論ぜず亦二十五
 法に歴て事に約して解を生ず方に能く正修の方便と為すに堪えた
 り是の故に前の六をば皆解に属す」等云云、又云く「故に止觀の
 正しく觀法を明かすに至つて並びに三千を以て指南と為す乃ち是れ

しゅつぐくきょう 終窮究竟の極説なり故に序の中に「説己心中所行法門」と云う良に

ゆえあ 以所有るなり請う尋ね読まん者心に異縁無れ」等云云、

そ 夫れ智者の弘法三十年二十九年の間は玄文等の諸義を説いて五時

はつきまつ 八教・百界千如を明かし前き五百余年の間の諸非を責め並びに

てんじく 天竺の論師未だ述べざるを顕す、章安大師云く「天竺の大論尚其の

たぐい 類に非ず震旦の大師何ぞ勞わしく語るに汲ばん此れ誇耀に非ず

ほつそつ 法相の然らしむるのみ」等云云、墓ないかな天台の末学等華嚴・真言

がんそ の元祖の盗人に一念三千の重宝を盗み取られて還つて彼等が門家と

しやうあん 成りぬ章安大師兼ねて此の事を知つて歎いて言く「斯の言若し墜ちな

かなし ば将来悲む可し」云云。

いわ 問うて曰く百界千如と一念三千と差別如何、答えて白く

ひやつかい 百界千如は有情界に限り一念三千は情非情に亘る、不審して云く

いちねん 百界千如は有情界に限り一念三千は情非情に亘る、不審して云く

非情に十如是亘るならば草木に心有つて有情の如く成仏を為す可き
 や如何、答えて白く此の事難信難解なり天台の難信難解に二有り一
 には教門の難信難解・二には觀門の難信難解なり、其の教門の
 難信難解とは一仏の所説に於て爾前の諸經には二乘闡提・未來に永
 く成仏せず教主釈尊始めて正覺を成じ法華經迹本二門に來至し
 給い彼の二説を壞る一仏一言水火なり誰人か之を信ぜん此れは
 教門の難信難解なり、觀門の難信難解は百界千如・一念三千・非情
 の上の色心の二法十如是是なり、爾りといえども木画の二像に於ては
 外典内典共に之を許して本尊と為す其の義に於ては天台一家より
 出でたり、草木の上に色心の因果を置かずんば木画の像を本尊に
 恃み奉ること無益なり、疑つて云く草木国土の上の十如是の因果の
 二法は何れの文に出でたるや、答えて曰く止觀第五に云く「国土世間

亦また十種じゅうしゆの法ほふを具ぐす所以ゆゑに悪国あくこく土相どさう・性じやう・体たい・力りき」等らと云い云ふ、釈籤しやくせん第六だいろくに云いく「相さうは唯心ゆいしんに有あり性じやうは唯心ゆいしんに在あり体たい・力りき・作さく・縁えんは義色心ぎしきしんを兼かね因果いんがは唯心ゆいしん・報ほうは唯心ゆいしんにあり」等ら云い云ふ、金錒論こんべいろんに云いく「乃すなわち是これ一草いちそう・二木にぼく・二礫にだつ・一塵いちじん・各おの一ひと仏性ぶつじやう・各おの一ひと因果いんがあり縁えん了りやうを具ぐ足そくす」等ら云い云ふ。

問いうて曰いく出処しゅつしよ既すでに之これを聞かく觀心かんじんの心しん如何いかに、答こたえて曰いく觀心かんじんとは我われが己心こしんを觀かんじて十法界じゆほふかいを見みる是これを觀心かんじんと云いうなり、譬たとえば他人たにんの六根ろくこんを見みると雖いえも未いまだ自面じめんの六根ろくこんを見みざれば自具じぐの六根ろくこんを知らしらず明鏡めいきやうに向むかうの時とき始はじめて自具じぐの六根ろくこんを見みるが如ごとし、設たとい諸經しよきやうの中ちゆうに処しよ処しよに六道ろくどう並ならびに四聖ししやうを載いすと雖いえも法華經ほふけき並ならびに天台大師てんだいだいし所述しよじゆつの摩訶止觀まかしかん等の明鏡めいきやうを見みざれば自具じぐの十界じゅうかい・百界千如ひゃっかいせんによ・一念三千いちねんさんぜんを知らしざるなり。

問うて云くいわ法華經ほけきょうは何れの文いすれぞ天台てんだいの釈いかんは如何いかに、答えて曰くいわ法華經ほけきょう第一方便品だいいちほうべんに云くいわ「衆生しゆじやうをして仏知見ぶつちけんを開かあしめんと欲ほす」等云云しよく是は九界所具ぶつがいの仏界じゆりようぼんなり、寿命品じゆりようぼんに云くいわ「是かくくの如ごとく我成仏じちうぶつしてより已來このかたはなはだおおい甚大おおいに久遠じゆみやうなり寿命むりようあそぎ・無量阿僧祇劫むりようあそぎこつ・常住じちうじやうにして滅せつず諸もろもろの善男子ぜんなんし我本菩薩もとぼさつの道みちを行じて成なぜし所ところの寿命じゆみやう今猶未いまなおいまだ尽つきまたかみず復上またかみの數かずに倍よせり」等云云きみづもん此の經文ぶつがいしよくは仏界所具ぶつがいしよくの九界くじゆなり、經きんに云くいわ「提婆達多だいばだつた乃至天王ないしてんのう如来に」等云云じごくしよく地獄所具ぶつがいの仏界ぶつがいなり、經きんに云くいわ「一いちを藍婆らんばと名なけ乃至汝等ないしなんじ但能よく法華ほつげの名なを護持ごじする者は福はか量りやうるべからず」等云云こ、是れ餓鬼界所具がきしよくの十界じじがいなり、經きんに云くいわ「竜女りゆうにょ乃至成等正覺しちうかく」等云云こ此れ畜生界所具ちゆくしやうの十界じじがいなり、經きんに云くいわ「婆稚阿修羅王ばちあしゆらおう乃至一偈いちげ・一句いっくを聞きいて・阿耨多羅三藐三菩提あのかたらさんみやくさんぼだいを得うべし」等云云しゆら修羅界所具しよくの十界じじがいなり、經きんに云くいわ「若もし人ひと・仏ぶつの為ための

ゆえ ないしみなすで 故に乃至皆已に仏道を成ず」等云云此れ人界所具の十界なり、經に
 いわ 云く「大梵天王乃至我等も亦是くの如く、必ず当に作仏することを得べし」等云云此れ天界所具の十界なり、經に云く「舍利弗乃至華光
 如來」等云云此れ声聞界所具の十界なり、經に云く「其の緣覺を求む
 る者・比丘・比丘尼乃至合掌を以て敬心し具足の道を聞かんと欲す」
 等云云、此れ即ち緣覺界所具の十界なり、經に云く「地湧千界乃至眞
 淨大法」等云云此れ即ち菩薩所具の十界なり、經に云く「惑説己身或
 説他身」等云云即ち仏界所具の十界なり。
 問うて曰く「自他面の六根共に之を見る彼此の十界に於ては未だ
 之を見ず如何が之を信ぜん、答えて曰く法華經・法師品に云く
 「難信難解」宝塔品に云く「六難九易」等云云、天台大師云く「二門
 悉く昔と反すれば難信難解なり」章安大師云く「仏此れを將て大事

と為す何ぞ解し易きことを得可けんや」等云云、伝教大師云く「此の
法華経は最も為れ難信難解なり随意の故に」等云云、夫れ在世の
正機は過去の宿習厚き上、教主釈尊・多宝仏・十方分身の諸仏・
地涌千界・文殊・弥勒等之を扶けて諫曉せしむるに猶信ぜざる者
之れ有り五千・席を去り人天移さる況や正像をや何に況や末法の
初をや汝之を信ぜば正法に非じ。

問うて曰く経文並に天台章安等の解釈は疑網無し但し火を以て

水と云い墨を以て白しと云う設い仏説為りと雖も信を取り難し、今

数ば他面を見るに但人界に限って余界を見ず自面も亦復是くの如し

如何が信心を立てんや、答う数ば他面を見るに、或時は喜び、或時は

瞋り、或時は平に、或時は貪り現じ、或時は癡現じ、或時は諂曲な

り、瞋るは地獄、貪るは餓鬼・癡は畜生、諂曲なるは修羅、喜ぶは天。

たいら
平かなるは人なり他面の色法に於ては六道共に之れ有り四聖は
みよつづく
冥伏して現れざれども委細に之を尋ねば之れ有る可し。

問うて白く六遣に於て分明ならずと雖も粗之を聞くに之を備う

るに以たり、四聖は全く見えざるは如何、答えて白く前には人界の

六道之を疑う、然りと雖も強いて之を言つて相似の言を出だせしな

り四聖も又爾るに可きか試みに道理を添加して方か一宣べん所以に

世間の無常は眼前に有り豈人界に二乗界無からんや、無顧の悪人も

猶妻子を慈愛す菩薩界の一分なり、但仏界計り現じ難し九界を具す

るを以て強いて之を信じ疑惑せしむること勿れ、法華經の文に人界を

説いて云く「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」涅槃經に云く

「大乘を学する者は肉眼有り」と雖も名けて仏眼と為す」等云云、未代

の凡夫出生して法華經を信ずるは人界に仏界を具足する故なり。

問うて曰く十界互具の仏語分明なり然りと雖も我等が劣心に
 仏法界を具すること信を取り難き者なり今時之を信ぜずば必ず
 一闡提と成らん願くば大慈悲を起して之を信ぜしめ阿鼻の苦を
 救護したまえ。 答えて曰く汝既に唯一大事因縁の經文を見開し
 て之を信ぜざれば釈尊より已下四依の菩薩並びに末代理即の我等
 如何が汝が不信を救護せんや、然りと雖も試みに之を云わん仏に
 値いたてまつつて覺らざる者・阿難等の辺にして得道する者之れ有れ
 ばなり、其れ機に二有り一には仏を見たてまつり法華にして得道す二
 には仏を見たてまつらざれども法華にて得道するなり、其の上仏教
 已前は漢土の道士月支の外道・儒教・四韋陀等を以て經と為して
 正見に入る者之れ有り、又利根の菩薩・凡夫等の華嚴・方等・般若等
 の諸大乘經聞きし縁を以て大通久遠の下種をする者多々なり例せ

ば独覺どっかくの飛花落葉ひけらくよくの如ごとし教外きょうげの得道とくどう是これなり、過去かこの下種げしゆ結縁けちえん無なき者もの
 の権小けんせうに執着しやくちやくする者は設たてい法華經ほけきやうに値あい奉ほうれども小権せうけんの見けんを出いで
 ず、自見じけんを以もつて正義しやうぎと為なるが故ゆえに通ほけきやうつて法華經ほけきやうを以もつて或あるは小乘經じゆけに
 同あるじ、或あるは華嚴けげん・大日經だいにちぎやう等らうに同あるじ、或あるは之これを下くだす、此等これらの諸師しよしは儒家じゆけ
 外道げどうの賢聖けんせいより劣おとれる者ものなり、此等これらは且しからく之これを置おく、十界互具じゅうかいこく
 之これを立たつるは石中いしちゆうの花はな・木中もくちゆうの花信はなごころじ難なんけれど縁えんに値あつて出生しゆつじゆうす
 れば之これを信にんず人界にんがい所具しよぐの仏界ぶつがいは水中すいちゆうの火か・火中かちゆうの水最すゐさいも甚はなはだだ信しんじ
 難がたし、然しかりと雖いえども竜火りゆうかは水みづより出いで竜水りゆうすいは火かより生うみ得いられざれ
 ども現証げんしゆうあ有あれば之これを用もちゆ、既すでに人界にんがいの八界はつがい之これを信しんず、仏界ぶつがい何なんぞ之これを
 用もちいざらん堯ぎやうしゆん・舜等しゆんとうの聖人しやうじんの如ごときは万民ばんみんに於おいて偏頗へんぱ無なし人界にんがいの仏界ぶつがい
 の一分いちぶんなり、不輕菩薩ふきやうぼさつは所見しよけんの人ひとに於おいて仏身ぶつしんを見るみる悉達しつたたいし太子たいしは人界にんがい
 より仏身ぶつしんを成じやうず此等これらの現証げんしゆうを以もつて之これを信しんず可べきなり。

問うて曰く教主釈尊は此れより堅固三惑已断の仏なり又十方世界の

国主一切の菩薩・二乘・人天等の主君なり行の時は梵天左に在り

帝釈右に侍り四衆・八部後に従い金剛前に導びき八万法蔵を演説

して一切衆生を得脱せしむ是くの如き仏陀何を以て我等凡夫の己心

に住せしめんや、又迹門・爾前の意を以て之を論ずれば教主釈尊は

始成正覺の仏なり、過去の因行を尋ね求れば、或は能施太子、或は

儒童菩薩、或は戸毘王、或は薩た王子、或は三祇・百劫、或は

動踰塵劫、或は無量阿僧祇劫、或は初発心時、或は三千塵点等の間七

万・五千・六千・七千等の仏を供養し劫を積み行満じて今の教主

釈尊と成り給う、是くの如き因位の諸行は皆我等が己身所見の

菩薩界の功德か、果位を以て之を論ずれば教主釈尊は始成正覺の

仏四十年の間四教の色身を示現し爾前・迹門・涅槃等を演説して

いっさいいしゆじゆつ　りやく　たま　いわゆるけぞう　じゆうまん　るしやな　あじんきよう
 一切衆生を利益し給う、所謂華蔵の時・十万台上の虞舎那・阿含経
 の三十四心・断結成道のの仏、方等・般若の千仏等、大日・金剛頂の千
 二百余尊、並びに迹門・宝塔品の四士色身、涅槃経の或は丈六と見る
 或は小身大身と現じ或は虞舎那と見る或は身虚空に同じと見る四種
 の身乃至八十御入滅舍利を留めて正像末を利益し給う、本門を以
 て之れを疑わば教主釈尊は五百塵点已前の仏なり因位も又是くの
 如し、其れより已来十方世界に分身し一代聖教を演説して塵数の
 衆生を教化し給う、本門の所化を以て迹門の所化に比較すれば
 一帝と大海と一塵と大山となり、本門の一菩薩を迹門十方世界の
 文殊観音等に対向すれば猴猿を以て帝釈に比するに尚及ばず、其の
 外十方世界の断惑証果の二乗並びに梵天・帝釈・日月・四天・四輪王
 乃至無間・大城の大火等此等は皆我が一念の十界か己身の三千か、

ぶつせつた 仏説為りと雖も之を信ず可からず。

此れを以て之を思うに爾前の諸経は実事なり実語なり、華嚴經に

云く「究竟して虚妄を離れ染無きこと虚空の如し」と仁王經に云く

源を窮め性を尽して妙智存せり」金剛般若經に云く「清淨の善の

み有り」馬鳴菩薩の起信論に云く「如来蔵の中に清淨の功德のみ有

り」天親菩薩の唯識論に云く「請く余の有漏と劣の無漏と種は金剛

喻定が現在前する時極円明純淨の本識を引く彼の依に非ざるが故

に皆永く喜捨す」等云云、爾前の経経と法華經と之を校量する

に彼の経経は無数なり時説既に長し一仏二言彼に付く可し、馬鳴

菩薩は律法蔵第十一にして仏記に之れ有り天親は千部の論師・四依

の大士なり、天台大師は辺鄙の小僧にして一論をも宣べず誰か之を

信ぜん、其の上多を捨て小に付くとも法華經の文分明ならば少し

恃怙有らんも法華經文に何れの所にか十界互具・百界千如・
 一念三千の分明なる証文之れ有りや、随つて經文を開拓するに
 断諸法中惡」等云云、天親菩薩の法華論・堅慧菩薩の宝性論に十界
 互具之れ無く漢土南北の諸大人師・日本七寺の末師の中にも此の
 義無し但天台一人の僻見なり傳教一人の謬伝なり、故に清涼国師
 の云く「天台の謬りなり」憲苑法師の云く「然るに天台は小乗を呼
 んで三藏教と為し其の名謬濫するを以て」等云云、了洪が云く
 「天台独り未だ華嚴の意を尽さず」等云云、得一が云く「咄いかな
 智公汝は是れ誰が弟子ぞ、三寸に足らざる舌根を以て覆面説の所
 説の教時を謗ず」等云云、弘法大師の云く「震旦の大師等諍つて醍醐
 を盗んで各自宗に名く」等云云、夫れ一念三千の法門は一代の権実
 に名目を削り四依の諸論師其の義を載せず漢土日域の大師も之を

もち
用いず、如何が之を信ぜん。

答えて曰く此の難最も甚し最も甚し但し諸経と法華との相違

は経文より事起つて分明なり未顕と已顕と証明と舌相と二乗の

成不と始成と久成と等之を顕わす、諸論師の事、天台大師云く

「天親・竜樹・内鑑冷然たり外には時の宜きに適い各權に拠る所あ

り、而るに人師偏に解し学者苛も執し遂に矢石を興し各一辺を保ち

て大に聖道に乖けり」等云云、章安大師云く「天竺の大論尚其の類

に非ず真旦の人師何ぞ勞わしく語るに及ばん此れ誇耀に非ず法相の

然らしむるのみ」等云云、天親・竜樹・馬鳴・堅慧等は内鑑冷然なり

然りと雖も時未だ至らざるが故に之を宣べざるか、人師に於ては

天台已前は或は珠を含み或は一向に之を知らず已後の人師或は初に

之を破して後に歸伏する人有り或は一向用いざる者も之れ有り但し

断諸法中悪の經文を会す可きなり、彼は法華經に爾前の經文を載するなり往いて之を見るに經文分明に十界互具之を説く所謂「欲令衆生開仏知見」等云云、天台此の經文を承けて云く「若し衆生に仏の知見無んば何ぞ開を論ずる所あらん当に知るべし仏の知見衆生に蘊在することを」云云、章安大師の云く「衆生に若し仏の知見無くんば何ぞ開悟する所あらん若し貧女に蔵無んば何ぞ示す所あらんや」等云云。

但し会し難き所は上の教主釈尊等の大難なり、此の事を仏遮会して云く「已今当説最為難信難解」と次下の六難九易是なり、天台大師云く「二門悉く昔と反すれば、信じ難く解し難し。鉞に当るの難事なり」章安大師の云く「仏此れを將つて大事と為す。何ぞ解し易きことを得可けんや」伝教大師云く「此の法華經は最も為れ

なんしんなんげ
難信難解なり。隋自意の故に等云云。夫れ仏より滅後に至る一千八
百余年。三国に経歴して但三人のみ有つて始めて此の正法を覚知せ
り。所謂月支の釈尊・真旦の智者大師・白域の伝教此の三人は内典
の聖人なり、問うて曰く竜樹・天親等は如何、答えて曰く此等の
聖人は知つて之を言わざる仁なり、或は迹門の一分之を宣べて、
本門と觀心とを云わず。或は機有つて時無きか或は機と時と共に
之れ無きか、天台伝教已後は之を知る者多多なり。二聖の智を用ゆ
るが故なり所謂三論の嘉祥・南三・北七の百余人・華嚴宗の宝蔵・
清涼等・法相宗の玄奘三蔵・慈恩大師等・真言宗の善無畏三蔵・
金剛智三蔵・木空三蔵等、律宗の道宣等、初には反逆を存し後には
一向に歸伏せしなり。

ただ
但し初の大難を遮せば無量義經に云く「譬えば国王と夫人と新た

に王子みこを生もぜん若もは一日いちにち若もは二日ふたにち若もは七日しちにちに至いたり若もは一月いちげつ若もは二月ふたげつ若もは七月しちげつに至いたり若もは一歳いちさい若もは二歳ふたさい若もは七歳しちさいに至いたり復また国事こくじを領理りょうりすること能あたわずと雖いえども已すでに臣民しんみんに宗敬そうきやうせられ諸もろもろの大王だいおうの子こ以もつて伴侶はんりよとならん、王およ及び夫人ふじんの愛心ひとえ偏しげに重おもくして常に与とも共に語かたらん所以ゆえんは何かいか何ん稚小ちせうなるを以もつての故ゆえにと云いうが如ごとく、善男子ぜんなんし是この持經者じきやうも亦復またまた是こくの如ごとく、諸仏しよぶつの国王こくおうと是この經きやうの夫人ふじんと和合わごうして共に是この菩薩ぼさつの子こを生もず若もし菩薩ぼさつ是この經きやうを聞きくことを得もて若もしは一句いっくも若もしは一偈いちげ若もしは一転も若もしは二転も若もしは十も若もしは百も若もしは千も若もしは万も若もしは億も万も恒河沙ごうがしゃ・無量無数むりやうむしゆてん転てんせば復また真理しんりの極ごくを体ていすること能あたわずと雖いえども、乃至な已ないに一切いっさいの四衆ししゆう・八部はちぶに宗仰おほせられ諸もろもろの大菩薩だいぼさつを以もつて眷属けんぞくとなし乃至な常に諸仏しよぶつに護念ごねんせられ慈愛じあい偏ひとえに覆おほわれん新学しんがくなるを以もつての故ゆえなり」等云云、普賢ふげん經きやうに云いく「此だいしの大乗だいじやう經典きやうてんは諸仏しよぶつの宝蔵ほうぞう

十方三世の諸仏の眼目なり乃至三世の諸の如来を出生する種なり
乃至汝大乘を行じて仏種を断ぜざれ」等云云、又云く「此の方等経
は是れ諸仏の眼なり諸仏是に因つて五眼を具することを得・仏の三
種の身は方等従り生ず是れ大法印にして涅槃海に印す此くの如き
海中能く三者の仏の清浄身を生ず此の三種の身は人天の福田なり」
等云云。

夫れ以れば釈迦如来の一代顕密・大小の二教・華嚴・真言等の
諸宗の依経往いて之を勘うるに或は十方台葉・毘盧遮那仏・大集
雲集の諸仏如来・般若染浄の千仏示現・大日・金剛頂等の千二百尊
但其の近因近果を演説して其の遠因果を顕さず、速疾頓成之を説
けども三五の遠化を亡失し化導の始終跡を削りて見えず、華嚴経・
大日経等は「往之を見るに別円四蔵等に似たれども再往之を勘う

れば蔵通二教に同じて未だ別円にも及ばず本有の三因之れ無し何を
以てか仏の種子を定めん、而るに新訳の訳者等漢土に來入するの曰。
天台の一念三千の法門を見聞して或は自ら所持の經經に添加し或
は天竺より受持するの由之を稱す、天台の學者等或は自宗に同ずる
を悦び或は遠きを貴んで近きを蔑みし、或は旧を捨てて新を取り
魔心・患心出來す、然りと雖も詮ずる所は一念三千の仏種に非ずん
ば有情の成仏・木画二像の本尊は有名無実なり。

問うて曰く上の大難未だ其の會通を開かず如何。

答えて曰く無量義經に云く「未だ六波羅蜜を修行する事を得ずと
雖も六波羅蜜自然に在前す」等云云、法華經に云く「具足の道を聞
かんと欲す」等云云、涅槃經に云く「薩とは具足に名く」云云、竜樹
菩薩云く「薩とは六なり」等云云、無依無得大乘四論・玄義記に云く

「沙とは訳して六と云う胡法には六を以て具足の義と為すなり」
吉蔵疏に云く「沙とは翻じて具足と為す」天台大師云く「薩とは梵語
なり此には妙と翻ず」等云云、私に会通を加えれば本文を讀が如し
爾りと雖も文の心は釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に
具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与
え給う、四大声聞の領解に云く「無上宝聚 不求自得」云云、我等が
己心の声聞界なり、「我が如く等くして異なる事無し我が昔の所願の
如き今は已に満足しぬ一切衆生を化して皆仏道に入らしむ」・妙覺
の釈尊は我等が血肉なり因果の功徳は骨髓に非ずや、宝塔品に云く
「其れ能く此の經法を護る事有らん者は則ち為れ我及び多宝を供
養するなり、乃至亦復諸の來り給える化仏の諸の世界を莊嚴し
光飾し給う者を供養するなり」等云云、釈迦・多宝・十方の諸仏は我

が仏界ぶつがいなり其の跡あとを紹しゅう繼けいして其の功徳くどくを受得じゅとくす「須臾しゅゆも之これを聞きく・

即すなはち阿耨多羅三藐三菩あのおくたらさんみやくさんぼだい提だいを究く竟きょうするを得えん」とは是これなり、寿量品じゅうりょうぼんに

云いく「然しかるに我実われじつに成じ仏ぶつしてより已この来かた、無量無辺むりょうむへん百千万那由せんまんなゆた佗た劫たな

り」等ら云いふ、我等われらが己心こしんの釈尊しゃくそんは五百塵点劫ごひゃくじんでんこうないししよけん乃至ぜんぜん所さん顯じんの三身さんじんにして

無始むしの古こ仏ぶつなり、經きやうに云いく「我本われもと菩薩ぼさつの道みちを行いじて、成なぜし所の

寿命じゆみやう、今猶いまなお未いまだ尽つきず復上またかみの數かずに倍たせり」等ら云いふ、我等われらが己心こしんの

菩薩ぼさつ等らなり、地涌じゆせんがい千界せんがいの菩薩ぼさつは己心こしんの釈尊しゃくそんの眷属けんぞくなり、例たとせば大たい公こう

周公旦しゆこうたん等らは周武しゅうぶの臣下しんか、成王せいおう幼稚ようちの眷属けんぞく、武内たけうちの大だい臣じんは神功じんこう皇后こうごうの

棟梁とうりやう仁徳におうじ王子しんかの臣下しんかなるが如ごとし、上行じやうぎやう・無む辺へん行ぎやう・淨行じやうぎやう・安立あんり行ぎやう等ら

は我等われらが己心こしんの菩薩ぼさつなり、妙藥だいし大師い云いく「当まに知しるべし身しん土ど一いち念ねんの

三さん千せんなり故ゆに成道じやうだうの時とき・此この本理ほんりに称かなうて一いち身ねん一ほん念ごう法界ほっかいに遍あまねし」等ら

云いふ。

夫れ始め寂滅道場・華蔵世界より沙羅林に終るまで五十余年の

間・華蔵・密巖・三变・四見等の三十二土は皆成劫の上の無常の土に

变化する所の方便・実報・寂光・安養・浄瑠璃・密巖等なり能变の

教主涅槃に入りぬれば所变の諸仏随つて滅尽す土も又以て是くの

如し。

今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出でたる常住の浄土なり

仏既に過去にも滅せず未来にも生ぜず所化以て同体なり此れ即ち

己心の三千具足・三種の世間なり迹門十四品には未だ之を説かず

法華經の内に於ても時機未熟の故なるか。

此の本門の肝心南無妙法蓮華經の五字に於ては仏猶文殊・薬王等

にも之を付属し給わず何に況や其の已外をや但地涌千界を召して八

品を説いて之を付属し給う、其の本尊の為体本師の袈裟の上に宝塔

空に居し塔中の妙法蓮華經の左右に釈迦牟尼仏・多宝仏・釈尊の
脇士上行等の四菩薩・文殊・弥勒等は四菩薩の眷属として末座に
居し迹化他方の大小の諸菩薩は万民の大地に処して雲閣月卿を見る
が如く十方の諸仏は大地の上に処し給う迹仏迹土を表する故なり、
是くの如き本尊は在世五十余年に之れ無し八年の間にも但八品に限
る、正像二千年の間は小乗の釈尊は迦葉・阿難を脇士と為し
権大乘並に涅槃・法華經の迹門等の釈尊は文殊・普賢等を以て脇士
と為す此等の仏をば正像に造り画けども未だ寿量の仏有さず、
末法に來入して始めて此の仏像出現せしむ可きか。

問う正像二千余年の間は四依の菩薩並びに人師等余仏・小乗・
権大乘・爾前・迹門の釈尊等の寺塔を建立すれども本門寿量品の
本尊並びに四大菩薩をば三国の王臣俱に未だ之を崇重せざる由

これ もう 之を申す、比ほほの事粗これ之を聞くいえどと雖も前代未聞ぜんだいみもんの故ゆえに耳目じもくを驚動きょうどうし
心意めいわくを迷惑めいわくす 請こつう重かさねて之これを説いさいけ委細こせいに之これを聞きかん。

答こたへえて白いく法華經ほけきょう一部八卷・二十八品 進ぜんんでは前四味ぜんし 退しりぞいては

涅槃經等ねはんぎきょうの一代いちだいの諸經しよきやう惣そうじて之これを括くくるに但いっきやう一經いっきやうなり始じやくめつじにじやうめ寂滅じやくめつ道場どうじやう

より終はんにやききやうり般若經はんにやききやうに至いたるまでは序分じよぶんなり無量義經むりやうぎきやう 法華經普賢經ほけきやうふげんの十

卷しちは正宗しちなり涅槃經等ねはんぎきやうは流通分るつうなり、正宗しち十卷じゆの中ちゆうにおいて亦また序

正流通るつう有り無量義經むりやうぎきやう並じよぶんに序品じよぶんは序文じよぶんなり、方便品ほうべんより分別功德品ぶんべつくとくの

十九行ふげんの偈げに至いたるまで十五品半しちしゆじゆぶんは正宗分ふんべつくとくなり、分別功德品ぶんべつくとくの現在げんざいの

四信ふげんより普賢經ふげんに至いたるまでの十一品半じゆと一卷いっは流通分るつうなり。

又また法華經等ほけきやうの十卷じゆに於おいても二經に有り各序おのおの正流通るつうを具ぐするなり、

無量義經むりやうぎきやうと序品じよぶんは序分じよぶんなり方便品ほうべんより人記品にんきほんに至いたるまでの八品はちは

正宗分しちなり、法師品ほっしほんより安樂行品あんらくぎやうほんに至いたるまでの五品ごほんは流通分るつうなり、

其の教主を論ずれば始成正覺の仏本無今有の百界千如を説いて
已今当に超過せる隨自意・難信難解の正法なり、過去の結縁を尋れ
ば大通十六の時・仏果の下種を下し進んでは華嚴經等の前四味を以
て助經と為して大通の種子を覺知せしむ、此れは仏の本意に非ず但
毒發等の一分なり、二乘凡夫等は前四味を縁と為し漸漸に法華に
來至して種子を顕わし開顯を遂ぐるの機是なり、又在世に於て始め
て八品を聞く人天等・或は一句一偈等を聞て下種とし・或は熟し・或
は脱し・或は普賢・涅槃等に至り・或は正像未等に小権等を以て顔
と為して法華に入る例せば在世の前四味の者の如し。又本門十四
品の一經に序正流通有り涌出品の半品を序分と為し寿量品と
前後の二半と此れを正宗と為す其の余は流通分なり、其の教主を
論ずれば始成正覺の釈尊に非ず所説の法門も亦天地の如し十界

くおん 久遠の上に国土世間既に顕われ一念三千殆んど竹膜を隔つ又迹門
なら 並びに前四味・無量義經・涅槃經等の二説は悉く随他意の易信易解・
ほんもん 本門は三説の外の難信難解・随自意なり。

ほんもん 又本門に於て序正流通有り過去大通仏の法華經より乃至現在の
けこんぎよう 華嚴經乃至迹門十四品涅槃經等の一代五十余年の諸經・十方
さんぜしよぶつ 三世諸仏の微塵の經は皆壽量の序分なり一品二半よりの外は
しちうじちう 小乘教・邪教・未得道教・覆相教と名く、其の機を論ずれば
とくはつくじちう 徳薄垢重・幼稚・貧窮・孤露にして禽獸に同ずるなり、爾前・迹門の
えんきようなぶつじん 円教尚仏因に非ず何に況や大日經等の諸小乘經をや何に況や
けしん 華嚴・真言等の七宗等の論師・人師の宗をや、与えて之を論ずれば
ぜんぜん 前三教を出でず奪つて之を云えば蔵通に同ず、設い法は甚深と称す
しめい とも未だ種熟脱を論ぜず還つて灰断に同じ化の始終無しとは是な

り、皆みなえは王女おうにょたりと雖いえども畜種ちくしゆを懷妊かいにんすれば其その子旃陀羅せんだらに劣おとれるが如ごとし、此等こねらは且かつく之これを閣おく迹門じやくもん十四品じふしゆひんの正宗じゆうしゆの八品はつひんは二往これ之これを見るに二乗にじゆうを以もつて正なと為なし菩薩ぼさつ・凡夫ぼんぶを以もつて傍ぼうと為なす、再往さいおう之これを勘かんうれば凡夫ぼんぶ・正像末しやうざうまつを以もつて正なと為なす正像末しやうざうまつの三時さんじの中なかにも末法まっぽうの始まじを以もつて正なが中なかの正なと為なす、問いわうて曰いわく其その証いかん如何いかんん、答こたえて曰いわく法師品ほうしほんに云いく「而しかも此この經にやういは如來にやうらいの現在げんざいすら猶な怨嫉おんしつ多おほし況いはんやや滅度めつどの後のちをや「宝塔品ほうとうほんに云いく「法はふをして久住くじゆうせしむ乃な乃至ないし來きれる所ところの化け仏ぶつ当たうに此この意いを知るべし」等と、勸持安樂等かんじあんらく之これを見る可べし迹門じやくもん是かくの如ごとし、本門ほんもんを以もつて之これを論ろんずれば一向いっかうに末法まっぽうの初はじめを以もつて正機しやうきと為なす所謂いわゆる一往いちおう之これを見る時ときは久種くしゆを以もつて下種げしゆと為なし大通前四味迹門だいつうぜんしのみしやくもんを熟じやくと為なして本門ほんもんに至いたつて等妙とうみやくに登のぼらしむ、再往さいおう之これを見れば迹門じやくもんには似にず本門ほんもんは序正流通俱るつうともに末法まっぽうの始まじを以もつて經きやうと為なす、在世ざいせいの本門ほんもんと末法まっぽう

の始は一同に純円なり但し彼は脱此れは種なり彼は一品一半此れは
但題目の五字なり。

問うて白く其の証文如何、答えて云く涌出品に云く「爾の時に
他方の国土の諸の来れる菩薩摩訶薩の八恒河沙の数に過ぎたる大衆
の中に於て起立し合掌し礼を作して仏に白して言さく、世尊若し
我等に仏の滅後に於て娑婆世界に在って勤加精進して是の經典を
護持し読誦し書写し供養せんことを聴し給わば当に此の土に於て広
く之を説きたてまつるべし、爾の時に仏諸の菩薩摩訶薩衆に告げ
給わく止め善男子・汝等が此の經を護持せんことを須いじし等云
云、法師より已下五品の經文前後水火なり、宝塔品の末に云く「大
音声を以て普く四衆に告ぐ誰か能く此の娑婆国土に於て広く
妙法華經を説かんものなる」等云云、設い教主一仏為りと雖も之を

奨勤しょうこんし給たまわば薬王等やくおうの大菩薩ほさつ・梵帝ぼんたい 白月にちがつ 四天等してんは之これを重おもんず可べき
 処ところに多宝たぼう・十方じゅうほうの諸しよ仏客ぶつと為もつて之これを諫曉かんきょうし給たまう、諸もろもろの菩薩等ほさつ
 は此おんごんの慇懃ふそくの付属ぶぞくを聞きいて「我不愛身命がふあいしんみょう」の誓言せいごんを立たつ、此等これらは偏ひとえに
 仏意ぶつゐに叶かなわんが為なり、而しかるに須臾しゆゆの間まに仏語相違ぶつごそうゐして過かはち八恒沙ちやうじやの
 此この土くきの弘經くききやうを制止せいしし給たまう進退しんたい惟いれ谷きわまり凡智およに及およばず、天台智者てんだいちしや
 大師前だいしぜん三後さんご三さんの六りく積せきを作つくつて之これを会えし給たまえり、所詮しよせん迹化さつげ他方たはうの大だい
 菩薩等ぼさつに我われが内証ないしやうの寿量品じゆりやうぼんを以もつて授与じゆよすべからず末法まつぽうの初はつめは謗法ぼうぽう
 の国くににして悪機あくきなる故ゆゑに之これを止とどめて地湧ぢゆう千界せんがいの大菩薩ほさつを召まして
 寿量品じゆりやうぼんの肝心かんじんたる妙法蓮華經みやうほつれんげきやうの五字ごじを以もつて閻浮えんぶの衆生しゆじやうに授与じゆよせし
 め給たまう、又迹化しやつけの大衆たいしゆは釈尊しやくそん初発心しよほつしんの弟子等でしに非あらざる故ゆゑなり、
 天台大師てんだいだいし云いく「是これ我われが弟子でしなり心まごに我われが故ゆゑを弘ひろむべし」妙樂みやうらく云いく
 子父こふの法ひるを弘ひろむ世界せかいの益えき有あり、「輔正記ふしちうきに云いく「法こ是これ久成くじやうの法こな

るを以ての故に久成の人に付す」等ニ云。

又弥勒菩薩疑請して云く経に云く「我等は復仏の髓宜の所説、仏

所出の言未だ曾て虚妄ならず、仏の所知は皆悉く通達し給えりと信

ずと雖も、然も諸の新発意の菩薩・仏の滅後に於て、若し是の語を聞

かば、或は信受せずして法を破する罪業の因縁を起さん。唯然り

世尊、願わくは為に解説して我等が疑を除き給え及び未来世の

諸の善男子此の事を聞き已りならば、亦疑を生ぜじ」云云。文の意

は寿量の法門は滅後の為に之を請ずるなり、寿量品に云く「或は

本心を失える。或は失わざる者あり。乃至、心を失わざる者は比の

良薬の色香、俱に好きを見て即便之を服するに病尽く除癒ぬ」等

云云、久遠下種大通結縁乃至前四味迹門等の一切の菩薩・二乘

人天等の本門に於て得道する是なり、経に云く「余の心を失える者は

其の父の來れるを見て亦歡喜し、問訊して病を治せんことを求むと
雖も、然も其の藥を与つるに而も肯えて服せず、所以は何ん。毒氣深
く入つて本心を失えるが故に此の好き色香ある藥に於て美からずと
謂えり。乃至、我今当に方便を設け此の藥を服せしむべし、乃至是の
好き良藥を今留めて此に在く汝取つて服す可し、差じと憂うる事
勿れ、是の教を作し已つて、復他國に至つて使を遣わして還つて告ぐ
等云云、分別功德品に云く「悪世末法の時」等云云。

問うて曰く此の經文の遣使還告は如何、答えて曰く四依なり四依
に四類有り、小乗の四依は多分は正法の前の五百年に出現す、
大乘の四依は多分は正法の後の五百年に出現す、三に迹門の四依
は多分は像法一千年、少分は末法の初なり、四に本門の四依は地涌
千界末法の始に必ず出現す可し今の遣使還告は地湧なり是好良藥

とは寿命品の肝要たる名体宗用教の南無妙法蓮華経是なり、此の良薬をば仏猶迹化に授与し給わず何に況や他方をや。

神力品に云く「爾の時に千世界微塵等の菩薩摩訶薩の地より涌出

せる者皆仏前に於て一心に合掌し尊顔を胆仰して仏に白して言さく

世尊・我等・仏の滅後・世尊分身の所在の国土・滅度の処に於て当に

広く此の経を説くべし」等云云、天台の云く「但下方の発誓のみを見

たり」等云云、道暹云く「付属とは此の経をば唯下方涌出の菩薩に付

す何が故に爾る法是れ久成の法なるに由るが故に久成の人に付す」

等云云、夫れ文殊師利菩薩は東方金色世界の不動仏の弟子観音は

西方無量寿仏の弟子・薬王菩薩は日月浄明德仏の弟子・普賢菩薩は

宝威仏の弟子なり一往釈尊の行化を扶けん為に娑婆世界に來入す

又爾前・迹門の菩薩なり本法所持の人に非れば末法の弘法に足らざ

る者か、經に云く「爾の時に世尊乃至一切の衆の前に大神力を現じ
給う広長舌を出して上梵世に至らしめ乃至十方世界衆の宝樹

の下師子の座の上の諸仏も亦復是くの如く広長舌を出し給う」等云

云、夫れ顯密二道・一切の大小乗經の中に釈迦諸仏並び坐し舌相

梵天に至る文之無し、阿弥陀經の広長舌相三千を覆うは有名無実

なり、般若經の舌相三千光を放つて般若を説きしも全く証明に

非ず、此は皆兼帯の故に久遠を覆相する故なり、是くの如く十神力

を現じて地涌の菩薩に妙法の五字を囑累して云く、經に曰く「爾の時

に仏・上行等の菩薩大衆に告げ給わく諸仏の神力は是くの如く

無量無辺不可思議なり若し我れ是の神力を以て無量無辺百千万億

阿僧祇劫に於て囑累の爲の故に此の經の功德を説くとも猶尽すこと

能わじ要を以て之を言わば如来の一切の所有の法・如来の一切の自在

の神力・如来の一切の秘要の蔵・如来の一切の甚深の事・皆此の經に
於て宣示顯説す」等云云、天台云く「爾時・仏告・上行より下は第三
結要付属なり」云云、伝教云く「又神力品に云く以要言之・如来・
一切所有之法・乃至宣示顯説經文明かに知んぬ果分の一切の所有の
法・果分の一切の自在の神力・果分の一切の秘要の蔵・果分の一切の
甚深の事・皆法華に於て宣示顯説するなり」等云云、此の十神力は
妙法蓮華經の五字を以て上行・安立行・淨行・無辺行等の四大
菩薩に授与し給うなり前の五神力は在世の爲後の五神力は滅後の爲
なり、爾りと雖も再往之を論ずれば一向に滅後の爲なり、故に次下
の文に云く「仏滅度の後に能く此の經を持たんを以ての故に諸仏皆
歡喜して無量の神力を現じ給う」等云云。

次下の囑累品に云く「爾の時に釈迦牟尼仏・法座より起つて大神力

を現じ給う右の手を以て無量の菩薩摩訶薩の頂を摩で乃至今以て
汝等に付属す」等云云、地涌の菩薩を以て頭と為して迹化他力乃至
・梵釈・四天等に此の経を嘱累し給う・十方より来る諸の分身の仏
各本土に還り給う乃至多宝仏の塔還つて故の如くし給う可し等云
云、薬王品 已下乃至涅槃経等は地涌の菩薩去り了つて迹化の衆
他方の菩薩等の為に重ねて之を付属し給う 拾遺嘱是なり。
疑つて云く正像二千年の間に地涌千界閻浮提に出現して此の経
を流通するや、答えて曰く爾らず、驚いて云く法華経並びに本門は
仏の滅後を以て本と為して先ず地涌に之を授与す何ぞ正像に出現
して此の経を弘通せざるや、答えて云く宜べず、重ねて問うて云く
如何、答う之を宣べず、又重ねて問う如何、答えて曰く之を宣ぶれば
一切世間の諸人・威音王仏の末法の如く又我が弟子の中にも粗之を

説かば皆誹謗を為す可し黙止せんのみ、求めて云く説かずんば汝
慳貪に墮せん、答えて曰く進退惟れ谷れり試みに粗之を説かん、
法師品に云く「況んや滅度の後をや」寿量品に云く「今留めて此に
おく」分別功德品に云く「悪世末法の時」藥王品に云く「後の五百歳
閻浮提に於て広宣流布せん」涅槃經に云く「譬えば七子あり父母
平等ならざるに非ざれども然れども病者に於て心則ち偏に重きが
如し」等云云、已前の明鏡を以て仏意を推知するに仏の出世は靈山
八年の諸人の為に非ず正像末の人の為なり、又正像二千年の人の
為に非ず末法の始め予が如き者の為なり、然れども病者に於いてと
云うは滅後・法華經誹謗の者を指すなり、「今留在此」とは
於此好色香藥而謂不美」の者を指すなり。

地涌千界正像に出でざることは正法一千年の間は小乘・權大乘

なり機時共に之れ無く四依のしえ大士しういん小権を以て縁ゆゑと為して在世ざいせの下種げしゆ
之を脱だつせしむ謗ぼう多くして熟益じゆくやくを破やぶる可べき故ゆゑに之を説とかず例れせば
在世ざいせの前ぜん四味しのみの機根きこんの如ごとし、像法ぞうぼうの中末かんのんに觀音やくおう・藥王なんがく・南岳てんだい・天台等じげん
と示現じげんし出現しゆげんして迹門しゃくもんを以て面もつと為し本門ほんもんを以て裏もつと為して
ひやつかいせんによいちねんさんぜんそ
百界千如ひゃくかいせんによ・一念三千其の義を尽せり、但理具を論じて事行の南無なむ
妙法蓮華經の五字並びに本門の本尊未だほんもん広ひろく之を行ぜず所詮しよせん円機えんき
有あつて円時無むき故ゆゑなり。

今末法の初小を以て大を打ち権を以て実を破し東西共に之を失し
天地顛倒せり迹化の四依は乱れて現前せず諸天其の国を棄て之を
守護せず、此の時地湧の菩薩始めて世に出現し但妙法蓮華經の五字
を以て幼稚に服せしむ「因謗墮惡必因得益」とは是なり、我が弟子
之を推え地涌千界は教主釈尊の初発心の弟子なり寂滅道場に来

そつりん

らず 林 最後にも訪わず不孝の失之れ有り迹門の十四品にも来ら

ほんもん

ず本門の六品には座を立つ但人品の問に来還せり是くの如き高貴の

ぼさつ

大菩薩・三仏に約束して之を受持す末法の初に出で給わざる可きか、

また

当に知るべし此の四菩薩折伏を現する時は賢王と成つて愚王を誠責

つて

し摂受を行ずる時は僧と成つて正法を弘持す。

い

問うて曰く仏の記文は云何答えて曰く「後の五百歳閻浮提に於て

こうせん

広宣流布せん」と、天台大師記して云く「後の五百歳遠く妙道に

つ

沾おわん」妙薬記して云く「末法の初冥利無きにあらず」伝教大師

い

云く「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り」等云云、末法太有近の

い

釈は我が時は正時に非ずと云う意なり、伝教大師・日本にして末法

の

始を記して云く「代を語れば像の終り末の初・地を尋れば唐の東・羯

の

西・人を原れば則ち五濁の生・鬪諍の時なり経に云く猶多怨嫉・

況滅度後きやうめつごと此この言良まじとに以有ゆえあるなり」

此この釈しやくに鬪争とうじゆうの時ときと云云いふいふ、今いまの自界叛逆じかいほんぎやく、西海侵逼しんぴつの二難なんを指さす

なり、此この時地涌千界出現じゆせんがいしゆつげんして本門ほんもんの釈尊しやくそんを脇士きやうじと為なす一閻浮提えんぶだい

第一だいいちの本尊ほんぞん此この国くにに立つ可べし月支震旦がっししんたんに未いまだ此この本尊ほんぞん有ましままず、

日本国にほんこくの上宮じやうぐう、四天王寺してんのうを建立こんりゆうして未いまだ時来あみだらざれば阿弥陀たほう、他方たほう

を以もつて本尊ほんぞんと為なす、聖武天皇しむむてんのう、東大寺とうだいじを建立こんりゆうす、華嚴經けこんきやうの教主きやうしゆな

り、未いまだ法華經ほけきやうの実義じつぎを顕あらわさず、伝教大師でんきやうだいし粗法華經そほほけきやうの実義じつぎを顕示じつぎ

然しかりと雖いえども時未いまだ来ゆえらざるの故ゆえに東方とうほうの鵝王がおうを建立こんりゆうして本門ほんもんの四

菩薩ぼさつを顕あらわさず、所詮地涌千界しよせんじゆせんがいの為ために此これを譲ゆずり与たまへ給たまう故ゆえなり、

此この菩薩ぼさつ・仏勅ぶつちやくを蒙いおむりて近ちかく大地だいちの下したに在あり正像しやうざうに未いまだ出現しゆつげんせず

未法みほつにも又出いで来こり給たまわらずば大妄語たうまごの大士たうしなり、三仏さんぶつの未来記みらいきも亦また

泡沫ほつまつに同おなじ。

此れを以て之を惟うに正像に無き大地震・大彗星等出来す、此等は金翅鳥・修羅・竜神等の動変に非ず偏に四大菩薩を出現せしむ可き先兆なるか、天台云く「雨の猛きを見て竜の大なるを知り花の盛なるを見て池の深きことを知る」等云云、妙楽云く「智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」等云云、天晴れぬれば地明かなり法華を識る者は世法を得可きか。

一念三千を識らざる者には仏・大慈悲を起し五字の内に此の珠を裏み末代幼稚の首に懸けさしめ給う、四大菩薩の此の人を守護し給わんこと大公・周公の文王を撰扶し四皓が惠帝に侍奉せしに異なる者なり。

ぶんえい
文永十年卯月二十五日

にちれんこれ
日蓮之を註す

四三

観心本尊抄送状

かたひら

帷かたひら一つ墨三長筆五官給び候かんじん了んぬ観心の法門ほうもん少少之これを注

して大田殿・教信御房等うしぼうに奉るたてまつ、此の事にちれん日蓮身に当たる大事だいじなり

之これを秘す、無二の志しを見みば之これを開かいたくせらる可べきか、此の書は難多

く答こた少なし未聞の事じなれば人耳目じもくを驚動きようどうす可べきか、設たといい他見たに及およぶ

とも三人四人座ざを並ならべて之これを讀よむこと勿なかれ、仏滅後ぶつめつ・二千二百二十

余年未いだ此の書しよの心こころ有あらず、国難こくなんを顧かえりみず五五百歳ごひゃくさいを期もちして之これを

演説えんぜつす乞こい願ねがくば一見いけんを歴来れきらいの輩やからは師弟ししてい共に靈山りやうぜんじやう浄土じやうどに詣もつでて三

仏げんみよつの顔貌はいけんを拜見はいけんしたてまつらん、恐きよう恐きよう謹言きんげん。

文永十年太齋卯月二十六日

日蓮

花押かおう

富木殿御返事

とぎどのごへんじ

富木殿御返事

とぎどのごへんじ

富木殿御返事

とぎどのごへんじ

富木殿御返事

とぎどのごへんじ

富木殿御返事

とぎどのごへんじ

富木殿御返事

とぎどのごへんじ

富木殿御返事